

カフェ・キエフと  
丸田アパート



就職氷河期のまっただ中、ろくでもない大学を卒業した俺にまともな就職口が望めるはずもなく、仕方なく田舎のスーパーに就職した。

どうせ出世したところで売り上げ不振の責任を負わされるだけなのは既に入社式前に分かり切っていたことなので、とりあえずクビにならない程度に仕事をこなすことだけ考えようと思い、そのとおりに4年間働き続けて現在に至る。

血迷った社長が大手スーパーの深夜営業に対抗する為という名目で営業時間を午後9時まで延長した為に、俺の貴重なオフの時間が潰される羽目になった。

とは言え、別にそんな夜遅くにすることなど大したことじゃないわけだが。

閉店後、ロス商品の廃棄と発注を終えて退店するのは午後10時過ぎ。こんな田舎では夜遊び出来る所なんてほとんど無く、精々ろくでもない飲み屋やゲーセンや漫画喫茶と言ったところである。

その日もアパートの駐車場に車を停めると、その足で徒歩5分の所にある『カフェ・キエフ』へと向かった。

『カフェ・キエフ』は、店主が語るところによれば「骨董、芸術に明るい若者の集うお洒落なカフェ」らしい。

だが俺の見たところ、入り口に置かれた左右で形も数も合わない大量のシーサーの置物や、耳元でガラガラとやかましいドアのベル、オレンジと紫がランダムに配置された薄暗い照明、色みも材質も、形すら統一されていないテーブルと椅子、一体どこで作っているのか、極彩色のティーカップとコースター等々、どれをとっても芸術に明るいとは到底思えない品々には、見るたびに不快にさせられる。

それでも週2、3回この店を訪れているのは、此処に集う人間を観察するのが面白いからだ。

時代の流れに取り残された抽象画家。作っては割るという行為を延々と繰り返す陶芸家。極度のあがり症のヴァイオリン奏者。人前でどもる活弁士。アル中で手の震えが止まらない書道家。先端恐怖症の彫刻家。楽器の弾けない作曲家。そして笑えない下ネタしか出来ない劇団員3名。

そして俺を加えた11人がこの店の常連である。

率直に言えば、全員、出来損ないの負け犬であった。

俺がこの店に通い始めた頃、俺1人だけがクリエイティブな肩書きを持っていなかったのも、店主に職業を聞かれた時、咄嗟に「小説家」を自称した。

どんな小説を書いているのか、と聞かれて大分焦ったが、「頭の中にはほとんどの形は出来ていて、もう書いてしまえばよいという段階なのだが、未だ最初の一文を考えめぐねている段階」ということにしておいた。

店主は「完成したら見せて下さいね」と愛想笑いをしてさっさと自分の仕事に戻ったが、どうせ内心では俺のことをせせら笑っていたのだろう。

他の客がいない時に他の常連のことを馬鹿にするような事を言っていたのは他ならぬ店主自身である。先に述べた常連達の説明はほとんど店主から聞いたままの内容だ。

俺が小説を書いているというのは実のところ全くの嘘ではない。高校の頃から自分で小説を書きたいと思い始め、大学時代には趣味の近い友人のサークルに加わり、同人誌に2度ほど寄稿した。

だがそれだけだ。今や同人誌は、あくまで漫画がメインであり、小説はページのかさ上げに使われるに過ぎず、事実同人誌を購入したものの目当ては全て友人の漫画（それも人気漫画のエロ系二次創作）であった。俺の小説は誰にも注目されていなかった。

それでもまだ創作意欲は自分の内面のどこかで燻っているようだった。だがもう一度書くきっかけが見つからなかった。書いたところで世に出す手段があるだろうか、それを考えると書き出すことが躊躇われた。そうして小説から遠ざかったまま、気がつくただ何もしないだけの年月が流れていた。

俺もこの常連達と大して変わらない負け犬だ。それを考えると憂鬱になり、自然と酒量が増える。

この店は『カフェ』と看板を出してはいるが、実体は、メニューの多くがアルコールと乾き物の悪趣味な飲み屋である。

その日は翌日が休みだったこともあり、何も考えず飲みまくって大分酔いが回っていた。

いつの間にか時間は午前0時を回っており、そろそろ閉店だということで帰ろうとした時、泥だらけの劇団員1名が店に転がり込んできた。

そいつは仲間内から「ノリ」と呼ばれている、小柄でやせっぽちの、猿のような顔をした俺と同じ年くらいの男であった。

俺は以前からそいつの卑屈な振る舞いを不愉快に思っていたので、もう少し冷静な判断が出来ていたらそいつを放って帰っていたところであった。

だがその日の俺は、酔った勢いで気が大きくなっていた。

「おう、『ノリ』。今日は早いんじゃないか？」

そういうと「ノリ」は床に転がったまま、あの卑屈な笑いを浮かべて頷いた。

「へへ……ちょっと仕事で下手打ったでやんすよ」

まだ声変わりしていない餓鬼のような声で小さくそう言うと、やっとの事で立ち上がり、カウンターの椅子に辿り着くと、マスターに水を一杯もらい、そこでやっとな息ついた。

「おいらの勤めてる店で、なじみの客を取っただの因縁つけられて、このザマでやんす。今夜は店の寮にも戻れそうもないでやんすなあ」

客を取った、なんて言うところを見ると、水商売か。ホスト？ こいつ、こんな顔と小汚い格好でホストなんてやってたのか。

ボコられてほうほうの体で此処に辿り着いた割には顔に傷がないのは、これでも一応顔で商売しているという自負があるからなのだろうか、とにかくノリは時折あばらをさすりつつ、ボコった相手に関する一通りの愚痴を俺たちに聞かせた後、カウンターに突っ伏してすすり泣きを始めた。

店主が大分迷惑そうな顔をしていたので、俺のアパートで飲み直そうと持ちかけると、ノリは鼻水を垂らしつつ「かたじけないでやんす」と何度もお辞儀をしながらついてきた。

俺は「丸田アパート」という貧乏長屋の205号室に住んでいる。

まさにアパートという名称がしっくり来るおんぼろの木造モルタル2階建て、外装の所々腐り落ちたトタン板をどこからか拾ってきた色違いのトタン板を貼り付けて補修するといった有様で、金銭に余裕があればまず住もうとしないだろうといった風情である。

それでも中は8畳和室一間、風呂トイレ付きの割と恵まれた造りだ。

家に上がらせてから気づいたのだが、ノリが全身泥だらけであったので、とりあえず風呂に入らせることにした。

ところがノリの様子がおかしい。風呂場の前でもじもじしている。俺はジャージと替えの下着をノリに押し付け、とりあえず泥を洗い流さないと部屋に入れないといい残して風呂場の引き戸を閉じ、部屋で酒の準備を始めると、引き戸の向こうのノリはようやく服を脱ぎ始めたらしい。

風呂から上がったノリは、それまで来ていた自分の服をゴミにして捨ててしまった。そこそこ高そうなスーツだったがいいのだろうか？ まあ、あちこち擦り切れていたりしてもう着られないかも知れないが。

安い焼酎とさきいかだけのつまみしかなかったが、ノリは飲める状態ではなかったので心配する必要はなかった。俺だけはしこたま飲んでノリの身の上話を酔いが回って朦朧とした意識のまま聞いていた。

ノリのお話を総合すると、ノリが働いていたのはやはりホストクラブで、先輩の派閥に所属し、盛り上げ役として精一杯努力してきたのだが、その先輩が店を辞める際、派閥の後継を巡って2名の候補が立ってもめ事が始まり、どちらにも行かなかった自分はどちらからも疎まれ、さらにスパイと疑われ、一方にボコられ、さらにもう一方に寮を追い出された、という事であった。

「もう水商売からは足を洗おうかと考えてるでやんす」

ノリはようやく諦めがついたといった風情でそう言った。

翌朝、俺が起きるとノリはもう居なかった。その時はああ、もう帰ったかと特に気に留めていなかったが、夕方になりノリが大きなバッグを2個抱えて俺の家に来た。

何事かと思ったが、昨日俺は酔った勢いに任せて「引っ越し先が見つかるまで家に置いてやる」と言ってしまったらしい。

「家に置いてもらえるのだから、家事くらいはやるでやんすよ」

と言ってはいるが、それにしたって気ままな独り暮らしの生活に他人に踏み込まれるのは容認

しがたい。

言ってしまったことは仕方がないので、とりあえず俺はノリが勝手に荷ほどきと掃除を始めるのをただ見ている。そして、出来ればなるべく早く出て行って欲しいと密かに願った。

で。

その日以来、俺の部屋にすっかり居着いてしまったノリだが、こいつは意外に使える奴で、朝は常に俺より早く起きて飯の用意をしている。帰ってくると夕食も出来ているし、いつの間にか掃除もされている。無造作に収納していた服や小物も少しずつ整理しているようだ。

来週から和菓子工場のバイトを始めるので朝は早く出てしまうが、それでも家事は今まで通りやると言う。

まるで丁稚か召使いの様な働きぶりに少々感心してしまい、それだけ働けるのなら工場でなくもう少しまともな職に就いたほうが良いような気がするが、ノリが言うには、自分はいくまで生活と芝居の資金の為に働いているに過ぎず、ちゃんとした仕事に就いてしまうと芝居に影響するから今の状態でよい、とのことであった。

そんなわけでノリが家に来て2週間、俺はノリとの共同生活にすっかり慣れてしまっていた。

ノリが朝の早い仕事（朝の4時半に家を出ているらしい）に就いた為、キエフに行くのは常に俺1人である。

ノリが俺の家に転がり込んできたことは既に常連達の知るところとなっており、噂の出所は間違いなく店主であるが、俺は店主を責めることはしなかった。

この店主が噂好きなのは周知の事実であるし、そのお陰で俺も面白い話にありつけるわけだから、自分の噂話だけ抗議するのもおかしい話だと思ったからである。

俺がカウンター席に座ると、早速近くのテーブルに居た活弁士が俺に声を掛けてきた。

「あっあああんた、さささ最近、どっどどどど同棲は、はじめたんだってな。もっももう、ややややったのか？」

どもりの上に下品な脳みそとは救い難い。同じテーブルで飲んでいた書道家が続いて俺に近寄ってくる。

「別にあんたの趣味にケチつける訳じゃないぞ？ こういうのは個人の趣味の世界の話で、俺達は社会の常識とかそう言った下らない事にとらわれてはいないからな。で、どうなんだ……、その、夜の具合なんぞは？」

言い方を変えただけで下品なことには変わりはないとしか思えん。

「やってねえよ。俺にはそんな趣味はねえし」

努めて冷静にそう返答すると、その2人は、愛想の悪い奴だというような顔をして自分の席に戻っていった。

カウンターの端っこには、ノリの仲間である劇団員の男2名が、でかい図体を懸命に縮めて座っていた。「ノリさんが居ないと脚本がまとまらないぞます」「こんな調子で次の芝居出来るでちゅか」といった内容の会話をぼそぼそと小声で話していたが、店の奥で陶芸家と彫刻家がいつものように頭を抱えながら奇声を発しているその声にかき消されて、会話の内容がほとんど聞き取れない。

そんな様子も、いつもの店内の様子と大して変わらない。

俺の家にノリが転がり込んできた、と言う事件は、この店て常連にとってその程度のものでしかないのだ。

この変わり者連中の様子を一変させるには、店内で殺し合いでも起こさない限り無理だろう。



その日も閉店時間まで飲んで家に帰ると、ノリはもう部屋の西側の壁に沿って寝ていた。

俺の寝床は元々部屋の東側に置いてあったので、そこしか寝る場所はない。出しっぱなしの家具調こたつの向こうで毛布にくるまって静かに寝息を立てている。5月とはいえ、夜はまだ冷える。毛布だけで足りるのかと思ったが、何となく言い出しそびれてそのままにしている。

ノリの目覚まし時計の音を聞いたことがない。おそらく携帯のバイブで起きてそっと部屋を抜け出しているのだろう。

俺も出来るだけ静かに部屋に入り、服を枕元に脱ぎ捨てて布団に入った。

その日の早朝、俺は珍しく物音で目が覚めた。

薄明かりの中、ノリがジャージのままバイトに向かう準備をしているところだったようだ。

未だ覚醒しきっていない、朦朧とした意識のままその様子を窺っていた。

物音を立てないように、そっと家を出て行くのを確認し、俺は再び眠りに落ちた。

その日は俺は珍しく早く帰れたので、午後6時過ぎには家に着いていた。

ノリは夕食の準備をしていて、共同生活が1月ほど経った今になって初めて2人で夕食を食べた。

その食事の最中、ノリが真顔でこう切り出した。

「実は、いつまでも此処にやっかいになるわけにもいかないので、この先のこと色々考えてたでやんすよ。水商売には戻る気はないでやんすが、居候とバイトの生活を続けるわけにもいかないし、劇団の活動も休みっぱなしだし……劇団の仲間はみんな実家暮らしなもんで、厄介になるわけにもいかんでやんす。そこで、ちょっと実家に帰ろうと思うでやんす。自分の人生を見つめ直してこようかと思ってるでやんす」

考えてみれば、今までノリとまともな会話をしたことがなかった。

「2日間だけ実家に戻るでやんす。その間家事は出来ないでやんすが、勘弁して欲しいでやんす」

もちろん、俺に反対する理由はない。

「ああ、わかった。自分の人生について真剣に考えるのは、いいことだよな、うん」

まるで自分に言い聞かせるように、俺はそんなことを口走っていた。

翌日、俺が出勤する少し前にノリは実家に出発した。実家がどこなのか、全く聞かなかったが

、軽装で行くところを見ると、割と近いところなのだろう。

ノリが玄関を出る際、その背中を見ていると、不意に胸騒ぎがし、ノリがもう帰ってこないような、そんな感覚に襲われた。

ノリが出て行った、静かな部屋。その部屋に1人していると、寂しさがじわじわと迫ってきた。長いこと1人で暮らしてきて、1人の生活に慣れているはずなのに、何故寂しいのだろう。何故、たった一月居候していただけただけのノリが出て行ったことでこんな気分になるのだろう。早いところ出て行って欲しいと願っていたはずなのに。

2日後、ノリは帰ってこなかった。

仕事を終えて帰宅すると、また以前のような暗い部屋。俺はもう、その孤独に耐えられなくなっていた。

だから、キエフに向かった。

今日も店内は数人の常連達が飲んでいて、いつもより少し多めだったが、まあ外見上は概ねいつもとさほど変わらない。

だが、今日の店内はいつもと少し様子が違った。

カウンターの端に座っている劇団員が、新顔の女を連れている。ノリが居ないから、新人を入れたのだろうか。

小柄で中肉、ショートカットだが、つば付きの帽子を深く被っている為顔は見えない。

店主に聞いてみても、にやにや笑っているだけで答えがないのが気味悪い。

そうしていると、ヴァイオリン奏者がその女に近づいて行って、何やら話しかけている。

口説こうとでもしているのだろうか、よせばいいのに極度のあがり症の為言ってることがしどろもどろになっていた。

案の定、相手にされなかったヴァイオリン奏者は露骨にがっかりした表情を見せて自分のテーブルに戻った。

その時、その女が俺の方をちらっと見ると、席を立て俺の方に近づいてきて、俺の隣に座った。

「相変わらず今日も、お一人ですか？」

「……？」

まるで、俺のことを以前から知っているような口調。

突如、女がプツ、と吹き出した。アハハハハ、という女の笑い声が、店内に響いた。

俺は未だ事情を把握できずにいた。

「どうも、今帰ったでやんすよ」

そう言って帽子を取った女の顔を見て俺は仰天した。

女はノリだったのだ。

「実家から戻ってきて、その足で劇団の仲間に会ってキエフに来たから、アパートに戻る間が無かったでやんすよ」

その事情はわかったが、俺が知りたいのは何故ノリが女になっているのか。いや、元々女なのに、何故男の格好をしていたのか、ということだ。

「オナベやってたのは、劇団の影響……と言っても、今のじゃなくて、東京にいた頃に所属していた劇団の女の座長に色々仕込まれた結果でやんす。地元に戻って、オナベクラブに所属してたでやんすが、元々女受けのする質じゃないから、先輩のヘルプ専門だったでやんす。その後のゴタゴタはもう話したでやんすね。今回帰省して、親とも散々揉めたでやんすよ。でもお陰で決心がついたでやんすよ。もうオナベは卒業でやんす」

ここまで笑顔で話していたノリは、そこで一瞬真顔になり、帽子を被り直した。

「だから、これからは、普通の女として生きます。1か月間、家に置いてくれてありがとうございました。実家に戻って、1から人生やり直します」

そう言ったノリの顔は何だか輝いて見えた。

荷物の整理もあるので、俺とノリは早めにキエフを出てアパートに向かった。

ノリ……いや、今はもう紀恵と呼ぶべきか、彼女は少しばかりの自分の荷物を手早くまとめた

。

今日で本当に最後か、そう思うと切なくなった。

実家で揉めるくらいなら、うちに居ろ、そう言ってしまおうか随分迷ったが、多分言うべきじゃないんだろう。彼女が真剣に考えて出した結論に、半端な俺が水を差すのは、やってはいけないことのような気がした。

それでも、夜も遅いし、今日一晩くらいは泊まっていてもいいんじゃないか、そう思って紀恵に言ってみた。

「お気持ちはうれしいですが、遠慮しておきます。未練がましくなりそうだし、女だとばらしてしまっただし。実は兄がすぐ近くまで車で来てるんです」

そう言われてしまっては、もう引き留める理由がない。

紀恵は帰り際、靴を履く際に、見送ろうとした俺に向き直った。

「ごめんなさい、何のお礼もせずに……」

いや、いいよ、そうは言ったが、俺は実際十分すぎるくらい紀恵には良くして貰ったからこれ以上お礼を貰う気にはなれなかった。

「これからは、キエフに行くことも少なくなると思いますが、お店で会ったら、何かご馳走しますよ」

そう言って笑ってみせた紀恵は、相変わらずの猿顔だが、本当にいい女に見えた。

こうして、俺と紀恵の共同生活は終わった。

結局、また次の日にキエフへ飲みに行った俺は、常連どもに散々からかわれたが、まともに相手するのも面倒くさかったので、聞き流すことに専念した。

今にして思えば、ノリとの共同生活はいい経験だったのではないかと、俺は勝手に思っている

。

だが、ただ1つの心残りがある。それは。

なぜ1か月も女と一つ屋根の下に暮らしていながら、1か月間も俺の家の風呂を使わせておき

ながら、ただの1度も風呂を覗こうとしなかったのか、それだけが悔やまれて仕方がないのだ。